



Title	第64 回 意匠学会大会報告
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 32-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 64 回 意匠学会大会報告

第 64 回大会は大阪工業大学・梅田キャンパスにて、ハイブリッド形式で開催された。第 62 回大会（2020 年度）は新型コロナウイルス蔓延による開催中止、第 63 回（2021 年度）は九州大学からのオンライン開催という状況を鑑み、先の読めない状況に備え、大会のひとつの魅力でもある対面形式の良さ、急速に浸透したりモート会議システムの利便性、この両輪を備えたハイブリッド形式での実施となった。

共催・協力：実行にあたり、開催校との共催、大阪中之島美術館の協力を得た。大阪中之島美術館とは、学芸員のシンポジウム招聘と美術館施設の見学を相互扶助として、意匠学会と美術館との連携ができた。

エクスカージョン：対面形式の良さを感じられる催しとして、2 件のエクスカージョンを実施した。第 1 日目の大阪中之島美術館では、学芸員の植木啓子氏より開催中の展覧会「みんなのまち 大阪の肖像——第 2 期：「祝祭」との共鳴。昭和戦後・平成・令和」の解説と、施設の設計コンセプトやバックヤードを案内いただいた。第 2 日目の大阪工業大学・梅田キャンパスでは、2017 年に新設された都心のキャンパスの施設を紹介した。

研究発表・パネル発表：12 件の研究発表と 7 件のパネル発表があった。遠方の会員もいたことから、オンライン発表も想定していたが、すべての発表が対面形式で実施され、しかもオンライン配信によって会場に赴くことのできない会員にも発表を視聴いただくことができた。

シンポジウム：シンポジウムは YouTube 配信による公開オンデマンドとし、会員だけでなく応募のあった非会員にも広く話題提供をする試みも行った。テーマは「戦後・大阪のデザイン——1950～1970 年代を中心に——」とし、テキストイル、グラフィック、工業デザイン、建築、それぞれの専門の 4 名のパネリストが発表した。その後のパネルディスカッションも含め、日本の敗戦復興から高度経済成長に至る時期に、大阪のデザインがどのような経緯を辿り形成されたのか、その根底にある気質や精神にも触れながら、大阪のデザインとそれを取り巻く状況を考察する機会を得た。

大会の参加申し込みや参加費は一部オンライン入金システムを導入した。今後、オンライン配信による大会や例会は、スタンダードになると予想されるが、意匠学会の活動を広く周知するためには、著作権処理や配信方式などへの配慮も検討材料となるだろう。学会運営の活性化のためにも、多くの若手研究者の入会にも期待したい。

上記をもって大会報告とし、ご協力いただいた多くの方がたにお礼を申し上げます。

（今井美樹 記）



第 64 回 意匠学会大会 (ハイブリッド開催)

日 時：2022 年 8 月 26 日 (金)・27 日 (土)・28 日 (日)

会 場：大阪工業大学 (梅田キャンパス 常翔ホール)

参加費：会員 1,000 円／非会員 2,000 円 (発表費：1,000 円)

共 催：大阪工業大学

協 力：大阪中之島美術館

大会実行委員会：今井美樹 (委員長)／益岡 了／赤井 愛／朽木順綱

第 1 日目 2022 年 8 月 26 日 (金)

エクスカージョン 1 開館記念展「みんなのまち 大阪の肖像 (2)」および施設見学 —— 15:00～17:00

案内：植木啓子 (大阪中之島美術館)

参加費：一般 1,000 円／学生 600 円

第 2 日目 2022 年 8 月 27 日 (土)

エクスカージョン 2 梅田キャンパス施設案内 —— 11:00～11:30

案内：赤井 愛 (大阪工業大学)

開会挨拶

挨拶：今井美樹 (大阪工業大学／大会実行委員長) —— 12:45～13:00

第 1 セッション

司会：青木美保子 (京都女子大学) —— 13:00～14:30

研究発表 01

上野リッチ —— ジャポニズムの新たな展開

牧田久美 (京都市立芸術大学芸術資源研究センター)

研究発表 02

図案研究者としての霜鳥之彦 —— 1920～30 年代にみる図案についての言説

和田積希 (京都工芸繊維大学美術工芸資料館)

研究発表 03

タイの伝統的な絵画における斜めのガイドライン —— タイらしさを表せる角度

ジャロンキットカジョン・ポッサナン (京都工芸繊維大学大学院)

第 2 セッション

司会：谷本尚子 (京都精華大学) —— 14:50～16:20

研究発表 04

日本式ジャカード織機の「^{ぼうとう}棒刀」,「^{ふみ}伏せ」が生み出す独自意匠

上田 香 (嵯峨美術大学)

研究発表 05

大正末昭和初期創作図案浴衣企画ブームの位相

—— 注染浴衣による江戸の意匠文化の継承と近代的図案観の受容

大久保尚子 (宮城学院女子大学)

研究発表 06

明清時代における南京雲錦の模様の特徴を分析する

王 澤 (京都工芸繊維大学大学院)

総 会 (学会表彰式含む ※意匠学会員のみ参加可能) —— 16:30～17:00

第3日目 2022年8月28日(日)

第3セッション	司会：下出茉莉（京都工芸繊維大学）	09：00～10：30
研究発表 07	戦前期日本のポスター用原画製作における海外雑誌の活用について 田島奈都子（青梅市立美術館）	
研究発表 08	1970年代の広告におけるポスターの役割 —— 1973年以降の石岡瑛子のパルコの広告を中心に 竹内幸絵（同志社大学）	
研究発表 09	リチャード・ハミルトンの《いったい何が、今日の家庭をこれほどにも変え、魅力的なものにしているのか？》のもう一つの意義 —— マテリアルのメディアに着目して 吉村典子（宮城学院女子大学）	
第4セッション	司会：川島洋一（福井工業大学）	10：40～12：10
研究発表 10	戦後における京都発信の建築家 —— 富家宏泰とその作品について 富家大器（京都美術工芸大学）	
研究発表 11	現実と空想のあいだ —— 岡山伸也の1973-1978年の商業インテリア 橋本啓子（近畿大学）	
研究発表 12	工業デザインとしての椅子 —— 日本の木工家具の量産化の始まりと加工技術 谷本尚子（京都精華大学）	
パネル発表	司会：大森正夫（嵯峨美術大学）	13：10～14：20
パネル発表 01	46 Rietvelds Chairs —— 縮尺 1/6-46 脚のリートフェルトの椅子の制作 佐々木一泰（滋賀県立大学）	
パネル発表 02	スポーツファッションをテーマとしたファッションデザイン画 王 怡（滋賀県立大学大学院）	
パネル発表 03	out of the blue —— 地域資源を「物語」で描く 高橋紀子（福井工業大学大学院）	
パネル発表 04	3D-Kinetoscope 益岡 了（大阪工業大学）	
パネル発表 05	つちのいえ —— 土の創造的可能性と造形教育の実験 井上明彦（元京都市立芸術大学）	
パネル発表 06	山楂糖 —— 中国の伝統菓子ブランド 関 也（大阪工業大学大学院）	
パネル発表 07	《私たちの秘密のお庭》仁愛保育園との art project 前田博子（仁愛女子短期大学）	
シンポジウム		14：40～17：00
	「戦後・大阪のデザイン —— 1950～1970年代を中心に ——」	
閉会挨拶	挨拶：谷本尚子（京都精華大学／意匠学会会長）	17：00～17：10

シンポジウム報告

テーマ：戦後・大阪のデザイン ― 1950～1970 年代を中心に ―

パネリスト：牧田久美／竹内幸絵／植木啓子／笠原一人

司 会：今井美樹

シンポジウムのテーマは、「戦後・大阪のデザイン ― 1950～1970 年代を中心に ―」とし、戦後復興から高度経済成長までの大阪のデザインの特徴が顕著なジャンルとして、テキスタイル、グラフィック、工業製品、建築、の 4 つのデザイン領域から、それぞれの特徴となる事象を発表していただいた。

発表タイトルとパネリストは以下の通り。

戦後の繊維産業復興とテキスタイルプリントデザインの創生

牧田久美（京都市立芸術大学）

「知性禍の悲劇」、リアリズムの大阪のグラフィックデザイン

竹内幸絵（同志社大学）

工業デザインの「重量」：大阪が見つめる「弱者たち」

植木啓子（大阪中之島美術館）

大阪における戦後建築、モダニズムとリアリズムのはざままで

笠原一人（京都工芸繊維大学）

牧田氏による発表は、戦後の経済復興の基幹となった繊維産業が、テキスタイルデザインの草創期を形成した 1945～1955 年前後の約 10 年の紹介である。GHQ の貿易振興により、繊維産業では特に綿加工貿易を主軸とした生産設備の立て直しが早まり、また繊維業界が集中していた大阪で 1950 年に行われた日英米綿業会談が、繊維生産の自由化を進める後押しにもなった。一方、国内プリント市場はこれらの復興を基盤として、戦後初の第一回京都染織見本市（1949）を皮切りに活性化し、やがて純綿製品を中心にプリント服地が、商社を介して全国に流通することとなった。デザインの的には和洋転換期に相当するものだったが、GHQ によって再結成された日本染織図案家連盟を中心にかつての着物図案家や気鋭グループ「エース」のメンバーらが、水玉模様、花柄、抽象幾何柄などで活躍した。やがて 1955 年頃には、和洋転換に紆余曲折した図案業界も本来の自信を取り戻し、形象の捉え方を刷新する当時の世界的な芸術傾向に呼応して旧来の図案を一新、すっきりとした文様と構図、簡素で機能的な色感で自由で新しいプリントのイメージを現出させた。市場的にも飛躍的な成功を収めたプリント業界は空前の隆盛へと向かう。こうした急激なテキスタイルプリントの発展には、当時東洋のマンチェスターと称された大阪、東洋のパリと称された京都の繊維産業が大いに貢献していた。

竹内氏による発表は、大阪におけるグラフィックには、モダニズムではなくリアリズムに価値を見出す精神があったのではないかと、という問いかけから始まり、その根拠として、戦前から大阪のデザインを特徴付ける「前衛」と「モダニズムの否定」の二つを挙げる。1930 年代、大阪のアマチュア写真家たちが前衛写真を起こし、広告にも使用されるようになる。もとより大阪の広告家たちは、（東京に比して）画一的なモダニズム表現を否定していたが、今竹七郎はモダニズムの象徴とも言える単化式ポスター

乱造の様相を「知性禍せる図案」と称し、(幾何学図形による理性的・理論的なデザインを好んだ東京人に比べて)人間味のある手描きの写実性や感性を大切にした。竹内氏は、これらの態度を今竹七郎や早川良雄らの言説より、「前衛を好む」「モダニズムよりも感性を重視」「自由奔放で在野の気風がある」と分析する。戦後も「デモクラート美術家協会」(1951 発足、権威を否定した無審査の団体)、「現代美術懇談会」(1952 発足、デザインと美術の無区別)、「具体」(1954 発足)といった団体によって、前衛と具象が混在する商業デザインの土壌が形成され、1960 年代にはモダニズムを超えた情熱的な表現で消費者を惹きつけた。1970 年の大阪万博においても、そのテーマ「人類の進歩と調和」が孕んでいた矛盾、機能性を追求する進歩(モダニズム)と、環境や他国との共生を望む調和(進歩と真逆の前衛や非機能)との同居は、大阪であったから包含でき、成功に導き得たのではないかと結んだ。

植木氏の発表は、大阪の工業デザインの特徴として、家電製品と工業化住宅を取り上げ、その性質を「弱い(弱電)」「軽い(軽電)」「柔らかい(販売戦略)」の3つのキーワードで示した。東京の「重電」(官製の発電・通信)に対し、「軽電」つまり民生用の電化製品・電子製品を請け負い、家庭内にある製品の多くが大阪のメーカーであったとし、庶民の新しい生活様式を提案した。1940 年代はラジオや電球の製造から始まり、松下電器産業、三洋電機、早川電機工業といった企業が、樹脂など軽便な素材で日用品を改良していく。この間、海外製品の模造品という非難も克服し、1950 年代にはさまざまな電化製品が発売され、三種の神器(洗濯機、冷蔵庫、テレビ)を揃えることが、一般家庭の標準となった。この頃には東京の企業も参入し、家電製品の激戦時代に突入していく。1960 年代には積水ハウス、大和ハウス工業、ナショナル住宅建材が、もとは倉庫などの別棟プレハブを発展させた工業化住宅によって新たな産業・デザイン分野を築いた。住宅の工業製品化には、設計方法、施主の要望、間取りや設備、施工の標準化など、これらを明確化して顧客の理解を促し購入してもらうためのコミュニケーションデザインも必要であった。このことは、家電製品においても(例えば松下電器の小売店ナショナルショップにおけるマーケティング戦略や販売指導)同様であり、顧客への販売の工夫も大阪の特徴であった。

笠原氏の発表は、大阪の戦後建築はモダニズムとリアリズムの間に位置し、その根底には施主や利用者を満足させる精神による設計があるとして、5 人の建築家を取り上げた。坂倉準三建築大阪事務所(西澤文隆)や、竹中工務店設計部(岩本博行)は良質な「モダニズム」建築を生み出したが、東京よりも繊細であるか、古風なデザインが特徴であった。一方で、村野藤吾、浦辺鎮太郎、根津耕一郎らは、アメリカの影響を受けた「リアリズム」に基づく建築が多く、商業都市の手本でもあったアメリカ建築が、大阪にも根付いたと言える。戦前より大阪の建築家はアメリカに学んだ者が多く、商業都市の手本でもあったアメリカにおける建築の影響が、近代大阪の都市整備の過程で根付き、戦後に引き継がれた。これら大阪の建築は、東京の新しい建築のあり方やコンセプトを目指すのではなく、施主の要望や、利用者を喜ばせる要素も設計することで、商業都市大阪ならではの「リアリズム」を提供した。

パネルディスカッションでは、各デザイン領域の近似性を確認しつつ、大阪のデザインに通底する精神には商業ベースの顧客優先的なもてなしのメンタリティがあり、人間的な理性と感性の二面性をもって経済性・合理性の一辺倒ではない活動の背景が浮かび上がった。大阪のデザインを改めて考察する機会を得たシンポジウムであったと考える。

(今井美樹 記)